

2023年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等：共生社会学科

該当番号 対象の取組

④	アクティブラーニングなど学生の主体的・能動的な学習態度を養う教育
---	----------------------------------

申請（代表）者： 引馬 知子

1. 取組の名称

持続可能性と共生社会づくりを主体的に考える実践プロジェクト

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	引馬知子、江島尚俊、國見真理子
----	----	-----------------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

（引馬ゼミ）地域の障害者施設、高齢者の見守りサロン、デイサービス等と協力しながら、社会福祉従事者、利用者、ボランティア、卒業生の方々と学生が繋がり、学生主体で複数の異なる「地域共生カフェ」を学内外で実現した。夏の地域カフェでは高齢者・障害者のみならず、台湾の留学生の参加の場もつくり、地域共生カフェ実施後に地域の子どもたちを交えた交流した。また、取り組みを神奈川県「地域共生実践セミナー」で学生が報告した。

（江島ゼミ）下記に示す計6回の施設見学・インタビュー調査、ならびに調査報告会を行った。

3年ゼミ＝6月：川崎市教育委員会主催ゆうゆう広場あさお、11月：社会福祉法人同愛会川崎中央療育センター、4年ゼミ＝5月：横浜市立港南中学校スクールソーシャルワーカー、7月：NPO法人児童発達支援にじいろ、7月：NPO法人東京シュレー、10月：社会福祉法人児童養護施設ル・プリ

3・4年合同＝1月：ゼミ内での調査報告会

（國見ゼミ）「共生社会における人と社会・環境との調和を模索する活動」をテーマとして、前期は3・4年合同で卒業生を招いて、人権擁護に取り組んでいる障害者就労支援の現場について学んだ。3年ゼミでは、7月に地域交流カフェへの訪問調査を通じて、共生社会と地域活動の実践例の理解を深め、共生社会実現に向けた地域での取組や課題について学んだ。また、9月には3・4年合同で古い町並みと伝統が残る谷根千地区（東京）を訪問して、歴史解説ガイドの解説の下、歴史的町並みと共生社会に関する訪問調査を行った。これらの調査を踏まえて1月にはゼミ内でこれまでの取組を振り返る報告会を実施した。

4. 取組の成果

（引馬ゼミ）学生が学外のさまざまな関係者と連絡を取り合うとともに、ゼミの学生同士が学年を超えて、さらにはゼミ外の学生も巻き込んで話し合い、地域共生カフェの場やプログラム（例えば、一緒に歌を歌う、折り紙をおる、さまざまな飲み物を提供する、司会をする等）づくりができた。活動を通じて、学生は試行錯誤するなかで企画力・実践力・コミュニケーション力をつけ、また多様な人々が集う場づくりの重要性等に気づいた。活動の成果を学外で報告するために皆で内容を振り返り、次の福祉活動に向けた方向性が見出すことができた。

（江島ゼミ）各回の訪問調査において、インタビュー項目を設定した上で聞き取りを行い、調査後には御礼文書発送、文字起こし、調査報告資料の作成を行った。特に、学生にとっては社会調査（質的調査）自体が初めての体験であったため、貴重な取り組みとなった。

（國見ゼミ）調べ学習と調査の組み合わせによって、学内での学びよりも理解を深めることができた。訪問調査の機会を得たことは、日常過ごす生活圏内での毎日に満足する傾向の高い本学学生達にとって社会的視野を広げることができる有益な体験だった。更に活動報告書作成を通じて、共生社会に対する具体的理解と能動的学習を合わせた自分の経験を深める貴重な経験をすることができた。

5. 課題・問題点

（引馬ゼミ）コロナ禍が残る時期に地域共生カフェを行くことは、福祉団体や地域サロンとの関わりにおいて、通常以上にさまざまな配慮や対応が必要であった。学生もコロナの影響を一定程度受け、当日を含め調整が大変であった。実践的な活動として学生の自主性が重んじられるが、それぞれの個性や状況もあり、互いを思い合いながら取り組みが進んだものの、各自が活躍できる役割づくりについてさらに工夫ができるのではないかと考えた。

（江島ゼミ）昨年度の反省を踏まえ、本年度は学生に対してインタビュー調査のトレーニングを入念に行った。しかし、やはり現場で緊張してしまう学生も少なからず生じてしまい、スムーズなやり取りができなかった。次回以降の課題としたい。

（國見ゼミ）学生間の学力乖離が大きい（学年トップレベルとボトムレベル）こともあり、同じようなクオリティの調査に全員で取り組むのが難しいところがあった。社会課題全般に対するリテラシーが低い学生が多く、一般常識レベルの教養を身に着けさせることの難しさがある。そのため、事前学習を十分行わせて上で実践的調査を実施できるようにしていきたいと考えている。

6. 自己評価

(引馬ゼミ) 学生が積極的に集まり意見を出し合う状況が、取り組みのなかで自然と生まれていった。学年、ゼミを超えた学生間の交流や、卒業生、専門職、利用者等との協力が生まれ、学生の主体的・能動的な学びが相当程度実現した。神奈川県主催の活動報告を含め、学生が自ら手をあげて担当を決めるなど、教員による枠組づくり、声掛け、確認等もありつつ、学生自身が成長とやりがいを感じて福祉活動を作り上げる様子を伺えた。

(江島ゼミ) 教員引率、学生単独を含めて計6回の訪問調査、ならびに3・4年ゼミの合同報告会を実施することができた。特に、虐待支援の現場を直接見聞きすることで、学生自身が強いリアリティをもって調査報告をしてくれたことは評価できる点だと感じた。

(國見ゼミ) 専門家からのヒアリング、訪問調査や社会科見学を通じて、学生自ら能動的に学習する活動を実践できた点は学生の学びを深める上で有益であった。更に、3,4年生合同報告会によって、日頃は交流の機会が乏しい学年同士が学年を越えた意見交換を通じて、お互いに学び合う実践研究ができた点は評価できる。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

(引馬ゼミ) 高齢者サロンや学祭で地域共生カフェを共に行った関係者から好評を得て、取り組みを続けていくことを学生自身が考えている。障害者施設の利用者の方々の保護者からもあたたかい声がたくさん届き、学生たちはとても励まされ交流の継続を計画している。ソーシャルワーク実習や就職活動、授業等があるなかで継続的かつ新たな活動の実現を目指すため、個々に異なる状況にある学生たちが無理をしないよう、また学外の機関や関係者とよい形で連携が取れるよう、常に留意とみながコミュニケーションを図ること等が必須である。

(江島ゼミ) 今回の調査報告会資料を印刷・製本した上で、保管管理をしていく。なお、インタビュー調査上における学生の問題点については、次年度におけるゼミ内指導を通して改善していきたい。

(國見ゼミ) 4年生が昨年度の経験を共有することで、3年生の社会科見学や訪問調査に対する興味や関心を高めさせる。ひいては、能動的に自発的に物事を学ぶ姿勢を身に付けられるように教員が助言・指導していく予定である。成果については、授業内でのフィードバックなど可能な限り学内に還元できる機会をもつように努める。

2023年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等：心理学科

該当番号 対象の取組

6	高大連携の推進
---	---------

申請（代表）者：寺沢 英理子

1. 取組の名称

高校生と大学生による「心の不思議探求プログラム」の実施

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

<input checked="" type="radio"/> 個人	<input type="radio"/> 組織
-------------------------------------	--------------------------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

このプロジェクトの狙いのひとつは、参加した高校生に何かを探求していくプロセスを実体験してもらい、それによって、調べることや調べた結果に基づいて考察を巡らすこと、そして、そこで得られた結果を的確に表現して伝えること、すなわち、「探求」という行為自体の面白さを実感してもらうことであった。本プロジェクトの特色は、高校生に加えて、心理学を学ぶ大学生と大学院生にも参加してもらったことである（心理学科3～4年生に対しても参加募集を行った）。プロジェクトの主役は高校生であるが、高校生だけで『心の不思議を探求』するのは、たやすいことではない。そこで、本学で心理学を学んでいる学生達にも参加してもらい、高校生と学生の混合チームで心の不思議を探求することにしたのである。高校生と共に探求活動を行うことで、学生も成長してもらうことがもう一つの狙いであった。プロジェクトを遂行する過程で、これらの狙いは十分に達成できたと思う。高大連携事業は、近年文科省が力を入れている「総合的な探究の時間」との関連で語られることが多いが、今回のプロジェクトでは、「探究」より適用範囲が広い「探求」の語を用いた。「総合的な探究の時間」を提供することよりも、「高校生と大学生が協働して心の不思議に迫る」ことに力点を置いたからである。

プロジェクトの活動経過は以下の通りである。

(1) 初回会合（2023年6月4日（日）10:00～17:00）

初めての顔合わせ。主宰者の教員からプロジェクトの趣旨を改めて説明したのち、緊張を緩めるため「心を柔らかくするワーク」を実施。この過程で高校生と大学生のペアが自然発生したので、それぞれを1チームとして探求テーマを決定。探求に必要な資料（図書）をチームごとにリストアップしてもらい、購入と配布を手配した。

(2) 第2回会合（2023年7月9日（日）10:00～15:00）

集合活動の1回目。ここまでに行った探求活動の進捗を各参加者が報告。その後、チームごとに別れて詳しい探求結果を出し合って共有。

(3) 第3回会合（2023年8月20日（日）10:00～15:00）

集合活動の2回目。それぞれのチームで探求の成果がまとまり始めた。成果の発表に向けての準備を開始。

(4) 第4回会合（2023年8月21日（月）10:30～16:00）

学生チームと教員チームが模範発表を行って、高校生に発表のイメージをつかんでもらった後、前日に引き続いて発表資料の作成を実施。

(5) 成果発表（2023年11月5日（日）10:00～15:00）

本学の学園祭にて、終日ポスターセッションの会場でポスター発表を実施。発表会場でも各チームが口頭発表を行った。

4. 取組の成果

それぞれのチームの探求テーマは次のとおり。

高校生・学生チーム1（横浜学園高校 池本健、田調大4年生 渋谷萌花）
「平等にしたい日本と世界」

高校生・学生チーム2（二俣川看護福祉高校 奥田真由、田調大3年生 門脇杏奈、田調大大学院生 阿部隼也）
「暴力の加害者心理」

高校生・学生チーム3（光明学園相模原高校 岡ちさと、田調大大学院生 井上朝陽）
「ストーキングの背景にある要因について」

高校生・学生チーム4（光明学園相模原高校 奥平千佳、田調大4年生 石井拓磨）
「依存心理と依存愛」

高校生・学生チーム5（科学技術学園高校 小須田城志、田調大3年生 本間佑基）
「心理学からみた友達と恋人の作り方 -対人心理学からの視点-」

保護者・学生チーム（保護者 池本誠、田調大大学院生 稲葉竜太郎）
「人生100年時代における青年と中年の間の壮年が生きるべき道」

学生チーム（田調大4年生 小林航海、丸古圭祐、山本歩、田調大3年生 稲垣凜花）
「共食」

教員チーム（田調大教員 櫻井優太、寺沢英理子）
「高大連携に求めるもの」

各チームはこの成果を大判のポスターにまとめ、学園祭にてポスター発表を行うとともに、パワーポイントを用いての口頭発表も行った。また、ポスター発表したものに、高校生や学生の参加感想、及び高校教員へのアンケート調査の結果も加えて、成果報告書を作成した。成果報告書は、参加者、高校生の参加高校、本学全教職員、本学園の一部の教職員に配布している。

以上に加えて、教員チームは、田園調布学園大学紀要第18号に「高大連携『心の不思議 探求プロジェクト』の実践報告：高大連携に求めるもの」を発表し、本プロジェクトの総括を行っている。

なお、直接的な成果とは思わないが、3年生で参加した高校生が、2024年度に本学心理学科への入学を果たしている。また、2年生で参加した高校生が、本学を含め心理学科への進学を考えていることを入試課長から聞いている。実際の進路決定まで影響したのならば、喜ばしいことである。

5. 課題・問題点

予算決定後から広報の準備を行ったので、広報にかけた時間が十分ではなかった。このこともあって、参加者は当初の見込みより少なく、高校生・保護者・大学生・大学院生合わせて、18名であった。申し込み者数はこの人数より多かったが、キャンセルや途中離脱もあった。しかし、この人数を対象として手厚く対応できたことは、大変贅沢な学びの提供になったとも言えるだろう。

今後の課題としては、広報の時期の前倒しやスケジュールの見直しが上げられる。さらに、高校生を複数回大学に招くという活動計画は、やる気のある高校生にとっては成果が大きいですが、参加のハードルも高くなるので、ここにも課題が残されている。今回は、予算が比較的潤沢であったので、大学生や大学院生にアルバイト代を支給できたが、今後も、今回並みの学生参加が見込めるかも課題の一つである。

今年度は、教育改善事業支援費を活用できたことから、大学生や大学院生にも格別な体験と成長の機会を提供できた。今後は、例えば社会教育実習などのカリキュラムに組み込むことも検討すべきかもしれない。教育とは時間もお金もかかるものだと思うが、現実的な枠組みの中でのプロジェクト内容の再検討は必須になると思われる。

最後にアンケートからの知見も少し記したい。学生が書いてくれた「大学の論文を意識しない自由な発表の形でも良いのではないかな」という提案には頷けるものがあり、発想そのものが自由だと感じさせられた。

6. 自己評価

参加した高校生たちは、一つのテーマについてあれこれ調べてみることで、その結果に自分の考えを加えて一つの形としてまとめることを体験し、その楽しさと達成感を感じ、さらなる学びへの動機を高めてくれた。また、その際に、少し先輩になる大学生や大学院生の援助をふんだんに受けるという環境を体験し、大学生になると、このように先輩たちと学びを深めることができるのだという実感を持たせたと思われる。

一方、参加した大学生・大学院生たちからは、高校生とチームを組み、どのように援助しようかと試行錯誤しながら自らも大きく成長した姿がみられた。

高校生の所属高校の教員からは、本プロジェクトへの好意的な評価をいただいている。

以上により、本プロジェクトの目的は十分に達成できたものと考えている。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

学生の主体的な参加を重視する高大連携は、他大学で実施されている高大連携とは一線を画すものと自負している。今後は、櫻井先生が高大連携プロジェクトを牽引していかれるとのことなので、この特色ある高大連携が益々拡大し、本学の発展にも寄与することを期待したい。